

週日の説教

金 大烈 神父 2009年10月23日(金)

《和解は、先に心を開いて、その人に近づこうとすることから！》

今日の第一朗読(ローマ 7・18 25a)の「使徒パウロのローマの教会への手紙」と福音朗読(ルカ 12・54 59)の「ルカによる福音」12章54節から59節は、ものすごく素晴らしい内容を含んでいる箇所です。

私は、自分のことで怒ってしまったとき、「なぜ私はこんなに弱いのか。なぜいつも誘惑に負けてしまうのか。」と自分を責める気持ちになります。そんなときに探してみるのが、この「使徒パウロのローマの教会への手紙」7章18節から25節の言葉です。素晴らしい話が出てきます。

たとえば、「善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。」「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。」そして「善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます。」最後に「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」

この箇所を読みますと、自信満々で高慢になる人はいなくなると思います。そして、「私はいつも善だけ行っています」という嘘つきもいなくなると思います。私達は誰でも、よいこと、素晴らしいこと、美しいことをしようとする気持ちを持っています。特にカトリック信者ならばなおさらです。しかし、実際の生活の中では、やはり善とはかけ離れた感情の働きを体験しています。自分の中に、そのような感情の働きがあることを皆様も認めてくださると思います。私もそう思っています。使徒パウロは、そういうことが人間の弱さである、とおっしゃっているのです。自分の中のこのような感情の働きを認めると、他の人を裁こうとする心が減ってくるのではないのでしょうか。認めるのが原則です。自分の弱さを認めなければ、私たちには神様に頼ろうとする心が、絶対に生じないのです。

皆様、使徒パウロは、霊的にこれ以上優れた人間はいないと言われるくらいの聖人です。そして最期は、勇気を持ち、大胆な心で、キリストだけを信じながら、殉教しました。そういう素晴らしい使徒です。しかし、そのような方でもこのくらい自分との戦いがあったことを考えると、私たちにも希望が生じます。「こんな立派な方でもこのような痛みがあった」と思えば、私たちにもいろいろな難しさを乗り越える希望が生じるのではないのでしょうか。

誰にでも心の安住を希望する気持ちはあります。しかしそれ以上に大事なことは、自分との戦いをやりとげなければならない、ということです。それを、今日の使徒パウロの言葉を通してもう一回思い出しましょう。

さあ、福音(ルカ 12・54 59)に入ってみましょう。今日の福音では、イエス様が叱っていますね。「明日の天気は予測ができるのに、明日、自分自身に起こることは、なぜ予想できないのか。」と。確かにそうでしょう。

「時代の徴表^{ちようひょう}」という言葉があります。日本語でこの「徴表」という表現を使うかどうかはわかりませんが、漢字はあると思います。「徴表」とは、何かを見たら次に何が起こるかすぐ分かるような、サインとか印という意味です。この「時代の徴表」を読まないイスラエル人をイエス様が叱っているところです。「なぜ、時代のことを読めないのか。この時代が必要としていることが読めないのか。」と。日本式に言いますと、「なぜ空気を読めないのか。まことの空気を読めないのか。」ということですよ。

では、今の時代の私たちにとって、正しく空気を読むということは、どういうことでしょうか。私の考えですが、やはり、愛だと思います。テレビや新聞、道を歩いている人々、レストランで食事をする人々を見て私が感じるのは、‘この世の中は、愛情の欠乏の時代ではないか’ということです。みんな寂しがっています。寂しがっているのに、その寂しさをなくすために相手と正しい関係を作ろうともしていません。どういうことでしょうか。愛の欠乏の時代、その時代に一番必要なものは愛情です。愛の欠乏の時代に住んでいる人々の特徴は、それをカバーするために本能に従って生きようとする事です。欲望に従って生きようとする事です。しかしそれでは、傷ついた心、受けた傷を癒すことはできません。もっと悪くなります。結局、受けた傷、愛の欠乏を癒すためには、もう一回愛の係わりを作るしか方法がありません。

そうしたら、愛の係わりを作る方法とは何でしょうか。今日、福音の中に『仲直り』と言う言葉がありましたね。似ている言葉に『和解』という言葉があります。でも、「和解しましょう」と言われたら、「私は喧嘩もしていないのに、なぜ仲直りをする必要があるのでしょうか。なぜ和解をするのでしょうか。」とすぐ聞かれると思います。しかし、『和解』とは、「悪い係わりや喧嘩をしたから、それを何とかして仲良くしましょう」という意味ではありません。『和解』のもとの意味は、「心を開いて、相手に近づくこと。近づく行為。」です。「相手より先に笑いかけ、先に話しかけ、先に手を伸ばす」そのような行為を『和解』と言います。もちろん、気の合わない人に会うと疲れます。私も疲れます。「だから会わなければよいのではないか」という気持ちは誰にでもあります。たとえば、何かの集まりがあって、その中に自分があまり好きでない人が何人かいます。そうしたら、「行かなくてもよいのではないか。行って気を悪くするより、行かないほうが自分の心の落ち着きのためによいのではないか。」と思うのが私たちの自然な心の働きです。しかし、そういうことでは、私たちは絶対に解放されません。いつも同じ寂しさを感じながら生きることになります。

皆様、福音は『和解』から始めます。心を開いて先にその人に近づいて行こうとするためにも、私たちには祈りが必要だと思います。よく考えてみてください。私たちには、拒んでいるタイプの人、拒んでいる性格の人が、本当にたくさんいると思います。同じように他の人も私のことを拒んでいるでしょう。しかし、それは私たちにはあってはいけないことなのです。

皆様、このような心で、今日の福音をもう一回黙想してみてください。「私たちは何のために生きるべきなのか、そして明日の自分はどうなるのか、正しい自分の姿で自分らしく生きるとはどういうことなのか。」よく考えなければならぬと思います。

結局、天国に行くか地獄に行くかは、そんなに問題ではないのです。心の中に福音が生きていれば、その人の生き方はもうすでに天国に入っているのです。しかし、そうでなくて、いつも憎しみばかりの生き方をしていたら、地獄の体験がもうすでに始まっているでしょう。このような心で、今日の私たちの生き方をもう一回振り返ってみましょう。私たちの正しい道、それは必ず清浄な道、愛の道であることを考えてみましょう。

ありがとうございました。